

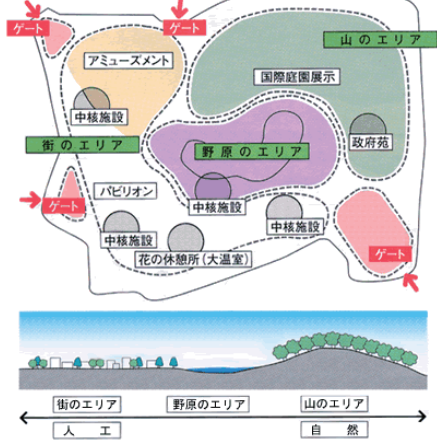
国際花と緑の博覧会と ランドスケープコンサルタンツの役割

はじめに

1990年、大阪市の鶴見緑地において「国際花と緑の博覧会（以下、大阪花博）」が開催されました。大阪花博は、構想から運営に至るまで関西を中心とする造園界が一致団結して進められ、ガーデニング・園芸が一般化するなど市民に社会的影響を与えるほどの成功をおさめました。2020年は開催から30年という節目にあたることから、今号は大阪花博を特集テーマとしました。

大阪花博の概要

- **博覧会種別**
博覧会国際事務局 (BIE) 認定 国際博覧会 国際園芸博覧会 (A1)
- **テーマ**
「自然と人間との共生」
- **期間**
1990年4月1日～9月30日 (183日間)
- **会場面積**
約140ha (駐車場・関連施設等を含む)
- **入場者数**
23,126,934人 (1日平均126,377人)



▲大阪花博の会場ゾーニング図
(出典:国際花と緑の博覧会記念協会HP)

大阪花博・鶴見緑地の歴史

■大阪花博開催前(～1990)

大阪花博の会場となった鶴見緑地は、1941年に都市計画決定され、大阪万博開催年である1970年に本格的な整備が開始されました。公園区域は元々低湿地だった場所であり、廃棄物や建設残土によって造成されました。1972年に大芝生など11.8haが供用開始されました。市制100周年記念事業を動機として、1981年から花博の開催検討が始まりました。1985年にBIE総会にて国際博覧会の開催が承認され、大阪花博の開催が決定しました。同年から造園コンサルタントが会場づくりに関わりはじめ、花博全体の基本構想、会場計画、設計デザインから当日の運営に至るまで様々な企業や団体等が協力しながら、開催に向けた支援業務に参画しました。

■大阪花博開催(1990)

1990年4月1日に大阪花博が開幕し、特別博覧会史上最高の入場者数を記録しました。

■大阪花博開催後(1990～)

1990年4月の「鶴見緑地みらい計画への提言」を受けて、同年12月に「鶴見緑地基本整備計画(基本計画)」、1991年8月に「鶴見緑地基本整備計画(基本設計)」が策定されました。現在の鶴見緑地は、これらの計画を受けて整備されたものになります。2015年には公園全体の指定管理者制度が導入されました。

■現在と今後の展開(2020～)

現在、約122.5ha(うち約54haが守口市)が開設しており、年間推計約435万人が利用する公園となっています。2020年は、花博開催30周年記念イベントとして「PARK JAM」が開催され、多くのアイディアによる公園活用プログラムが行われました。今後の展開は、2019年に策定された「鶴見緑地再生・魅力向上計画」に基づき、鶴見緑地の新たなフェーズとして、鶴見緑地のポテンシャルを活かしながら、行政と民間が連携した公園全体の一体的マネジメントの検討が進められています。

【出典】「鶴見緑地再生・魅力向上計画」、「公益財団法人国際花と緑の博覧会記念協会HP」、「花博記念公園鶴見緑地HP」、「花博の会場計画とデザイン(冊子)」

編集・構成 友國 慎也

1990年大阪花博とCLA

文:糸谷正俊 CLA顧問
(株)総合計画機構 相談役
(株)公園マネジメント研究所 経営顧問

2025年大阪・関西万博開催がBIE(博覧会国際事務局)総会で正式に承認された(12月1日)。新聞情報ではコロナ禍やIR遅れ等で計画づくりが遅れていること、建設費が増大し、負担増に財界は難色を示していること等、課題が多いとされる。一方2027年横浜国際園芸博覧会開催が決定し、国土交通省では横浜国際園芸博の具体化検討委員会も第1回が開催された。横浜国際園芸博は、1990年大阪花博と同じように、国際園芸家協会(AIPH)に承認された世界園芸博覧会<A1>で、BIEにも承認される認定博を目指している。東京オリンピック後は、大阪・横浜での2つの国際博覧会が大いに注目されることとなる。

ここではCLAが深くかかわった1990年国際花と緑の博覧会(大阪花博)について、自分の体験を綴り、またCLAが果たした役割について振り返りたい。

私は、1986年から花博の会場計画作成チームに参画し、その後会場の観客動線計画や、博覧会協会が設置する花壇の管理計画等を担当した。その中で、私自身、最もハードな時期として記憶するのは1987年秋から次の年の夏にかけての会場計画の作成作業である。会場計画作業は、CLA関西支部を中心に選出されたメンバーからなる花博プロジェクト室が担当した。当初は、会場建設と運営の責任者である花博協会の意向を受けてプランを作り、会場計画委員会の意見を反映した計画づくりを目指したが、これがなかなか思ったように進まない。まず、博覧会協会が寄り合い所帯であり、建設省、農水省という国の思惑、そして地元大阪市の考え、さらに民活博覧会という性格から民間企業の意向などが、未調整のまま、プロジェクト室に降りてくる。協会内部でいえば、大阪市の考えを受けた存置主要施設の配置、出展部や事業部による出展施設、営業施設の場所取りなどが、会場計画の決まる前に先行してしまう。これを一旦与件として作成したプランに対しては、委員会の先生方から、都市計画、公園計画のような土地利用計画では2000万人を集める博覧会場の計画とは言えない、との強いお叱りを受ける。

当時のプロジェクト室のスタッフは20代から40代という年齢構成。情熱とスタミナだけは誰にも負けない、という自負だけで、クライアントの重物や各界の大先生と丁々発止でやりあった。

幸い直接の発注者である協会会場建設部の幹部や建設省の担当者からの暖かい支援があり、またCLA会長の小林治人氏をはじめCLA関西支部長藤田好茂氏等からの強い後押しもあって、何とか88年3月の第5回会場計画委員会で、山のエリア、街のエリア、野原のエリアのコンセプトで構成される原案が承認された。次いで88年5月、花博プロジェクト室は国際花と緑の博覧会会場計画事業室に改組してメンバーが拡充され、ここが中心となって第2次会場計画の作成に着手する。そして同年7月第2次会場計画(案)が第7回会場計画委員会で承認され、会場計画事業室はこの段階で解散し、その後はCLA各社対応で設計業務が進められることになった。

この間の悪戦苦闘ぶり、またその後の設計監理段階での苦労の数々は、CLAがまとめた冊子「花博の会場計画とデザイン」をお読みいただきたい。この冊子の資料編にはCLAが関与した業務一覧がある。85年会場基本構想から始まり、シンポジウム等資料収集業務に至る188の受託のリストを改めて見ると、CLAが果たした花博での中心的役割は一目瞭然である。特にCLAの若い人々には是非お読みいただき、今後の仕事の糧にいただければ嬉しい。



▲外国庭園(1990年当時)
(出典:花博の会場計画とデザイン(冊子))



▲立体花壇(1990年当時)
(出典:花博の会場計画とデザイン(冊子))



▲『花博の会場計画とデザイン』

花博開催30周年記念イベント「PARK JAM」

～CLA関西支部の取り組み～

PARK JAMの概要

1990年に開催された国際花と緑の博覧会(大阪花博)の30周年を記念するイベント「PARK JAM」が、11月21日(土)及び11月22日(日)の2日間に花博記念公園鶴見緑地で開催されました。大阪市では、5年後に日本国際博覧会(大阪・関西万博)の開催を控える中、大阪・関西万博のテーマである「いのち輝く未来社会のデザイン」にも繋がるみどりのまちづくりの取り組みとして、メモリアルイヤーを祝福するイベントを開催し、イベントを楽しんでもらいながら、今後の新たな公園の使い方や楽しみ方を市民や事業者等と共有し、ともに考えていく契機とすることを目的としています。ネーミングの「PARK JAM」には、公園が人と自然、人と人、人と食、人と作品、人と音楽などが交錯(JAM)する場所になるようにという想いが込められています。市民から募集したアイデアを取り入れた音楽プログラムやグルメイベント、恐竜の展示や熱気球体験等が行われ、多くの人が訪れました。

- **開催日時** 2020年11月21日(土)・11月22日(日) 10時～16時30分
- **開催場所** 花博記念公園鶴見緑地(大阪市鶴見区緑地公園2-163)
- **主催** 大阪市建設局公園緑化部調整課



▲キッチンカー出店の様子



▲つるみ恐竜王国 恐竜展示の様子



▲熱気球体験の様子

CLA関西支部ブースでの資料展示

CLA関西支部では、11/22(日)に国際庭園西口広場でブースを設け、会場設計時の図面や記録集、当時の新聞記事などの貴重な資料の展示を行いました。同時に、水景協会からスタンプラリーが開催され、当日は多くの人々に賑わいました。国際庭園がコスプレイヤーによる人気の撮影場所として、また近所のアップダウンのある散歩コースとして活用されるなど、運営に関わった支部メンバーも新たな発見や、国際庭園の場の重要性を改めて認識しました。ブースでは、国際庭園における開催当時の図面やバス等をパネルにて展示し、花博を知らない世代の方々に当時の様子を知ってもらうとともに、来場されていた方々には当時の風景を思い出していただくことで、2025年大阪関西万博への期待へつなげるきっかけとなりました。



▲会場の様子(国際庭園西口広場)



▲CLA関西支部展示ブース



▲スタンプラリー参加の様子



▲展示状況(国際庭園の展示パネル)

庭園めぐりツアー

30年前の会場設計に関わった当協会として、当時の国際庭園づくりの話を聞いていただきながら庭園を巡る「庭園めぐりツアー」を午前と午後各1回行いました。午前には13名、午後には10名の計23名の参加があり、参加者からはもっと見たかったという感想もありました。ツアーでは、下記のツアーマップを作成・配布し、花博開催後、公園施設として開放・管理されている庭園を花博当時を知る専門家と一緒に回り、当時の苦労話や状況を聞きながら、30年の経過を体感しました。



▲庭園めぐりツアー用のマップ(関西支部作成)



▲中国:30人職人が関わり、窓から庭園が見られた



▲モロッコ:タイルの会期中施工は評判が良かった



▲アイルランド:修道士が瞑想する石積小屋が特徴



▲ネパール:資材は全てネパールから持ち込んだ

ツアー後には、参加者にアンケートを実施しました(結果は下記参照)。国際庭園の持つポテンシャルを活かした公園の使い方や楽しみ方を参加者と共有した取り組みとなりました。

■アンケートでの主な意見

- ・珍しい建築物も残っているので、庭園の特徴をできるだけ保存して頂きたい。
- ・ボランティアが参加しやすい形で、植栽・飾花ができれば良い。
- ・解説板(QRコード)はハードルが高い。今回のブースにあった展示のような内容が良い。
- ・今後はスポンサー(インターナショナルスクール、大学留学生)を募集し、イベントなど運営をしては。
- ・当時の賑わいや想いをはせることができて良かった。 など

編集・構成 CLA関西支部、坂田 奈美子、増田 将典